



「第十九、第二十師團、航空大隊新設及輜重兵大隊、電信隊編制改正要領制定の件」

陸軍航空の歴史は気球から始まりました。陸軍は日露戦争において臨時気球隊を編成、旅順攻撃を容易にしたことなどから、明治 40(1907)年には東京中野町に気球隊を創設しました。

一方、欧米各国の飛行機研究進展にともない、陸海軍大臣の監督下に明治 42 年臨時軍用気球研究会（会長：陸軍中將長岡外史）が創設されました。同研究会は飛行場を所沢に選定し整備を始めます。こうして所沢は陸軍航空の発祥地となり、明治 44 年 4 月には、欧州派遣から帰国した工兵大尉徳川好敏操縦の「アンリー・ファルマン」が飛行高度 10 メートル、距離 800 メートルを飛行しました。大正 2(1913)年には気球隊も所沢に移駐しました。

大正 3 年、気球隊は、青島戦役において気球及び飛行班からなる臨時航空隊の編成を命ぜられ、各種戦闘勤務等、航空機として初めての実戦を経験しました。大正 4 年 12 月には平時編制改正にともない、気球隊は解散し、初めての飛行隊といえる航空大隊（本部、飛行機中隊、気球中隊）が所沢に新設されました。史料から、陸軍が航空大隊を 2 カ年かけて整備しようとしたことと(登録番号：大日記-陸軍省-密大日記 T4-1-9)、写真からは、大正 14 年頃の所沢飛行場の状況が窺えます(登録番号：陸空-写真-70)。

その後航空第 1 大隊がシベリア出兵に参加するなど、陸軍航空は発展拡充していきます。